

京都の和装メーカーが、和服の製造技術を使った新しい「和のデニム」を生み出した。紋付きの黒染めを応用したブラックジーンズや、その折り返しに桜の花を染めたレディース用など。日常着を入り口で、和服の世界に親しんでほしいというねらいがある。(安部美香)

京都の染色業者らが着想

「紋付きには柄がないので黒さを究めしかなかった。より黒くする技術を他の分野に生かそうと考えた」と、荒川徹社長(51)は語る。

上の黒くする技術とは、染め上がった生地を糊着をかける方法で、約20年前からやっていた。「表面に糊着の膜を付くと光を吸収し、真っ黒に見える」。

同社は1915(大正4)年創業。年間約3万5千反の黒紋付着用生地を染めているが「和装のマーケットは、30~40年前に比べて1/10程度まで縮小し

京都紋付のジーンズ。左から「黒染め」「紋」と「紋」2点=京都市中京区



①ポケットやベルト部分に桜などの染めを施したジーンズ②デザイナーの桑山豊章社長=京都市下京区、京都デニムのショップ

着物入門に和のデニム



紋付きの黒染め=京都市の京都紋付

「最近では商売に慣れていない時代」と荒川社長は言う。転機は2003年。市内のアパレル会社から、綿のかばんやTシャツの黒染めを依頼された。糊以外を染めるのは初めてだったが、その後も紳士服やスポーツ用品などのブランドから依頼が相次いだ。

細かい分業制で成り立つ和装業界だが、一工程だけを担当する会社で終わらなくなった。加工技術をブランド化しようと「御黒染司」を名乗り、染めを手がけた他社製品にもロゴを入れてもらった。

デニムブランドの設立にあたり

「J」京都駅丸の内中央口から徒歩約5分。「京都デニム」のショップには、ピンクや黄色、紫などの花柄をあしらったかわいらしいジーンズが並び、ボタニカルやその折り返しからのおく桜花がトレードマーク。部分的に色抜いて花を手描きしたものや、生地全体にピンクやブルーを重ねたものなど多形だ。ほとんども占めるレディースのジーンズは2万円弱、3万円台。スカートや薄手のワンピースもあ

「豊明」が08年に開いた店だ。もとは江戸時代中期創業の「桑山商店」。白生地から染色業に転じ、京友禅やフオーマルなどの染め得意としてきたが、04年から小売も始めた。

デニム素材に注目したきっかけは、染色業界の深刻な人材不足だった。桑山豊章社長(32)は、染色の技術を継承する新しい分野として思いついた。「着物の形にとられる必要はない

つては、国産デニムの産地、岡山に学んだ。生地は岡山から仕入れ、デザインは、岡山のジーンズメーカー出身の女性が手がけたという。秋からはスキニーのストレッチなどレディースも始める。糸から自分で染める「色落ちしないデニム」も計画中だ。

最終目的は、若い世代を和装に回帰させること。いずれは「BLUWHY」ブランドの和服を出し、30~40代の男性に着てほしいと

「大阪豊大でデザインを学んだ。桑山社長がデザインし、営業と広報は大学の後輩の宮本和友さん(30)が担当する。リバイスの原形に近づけるほどよいとされる男性用に比べ、丸みのある女性の体に合わせるデニムは難しいという。でもレディースをメインにするのは「女性の方が、染めによる多様な色柄を感じてもらいやすいから。立体的なパターンをつくり、縫い幅や糸の張り具合にも気をつけよう」。

デニムを入り口にして、若い職人がこの世界に入ってきてくれることを期待する。

ツッパる楽しみどこへ

滝沢直己

表参道に事務所を移して2年がた。有名レクトショップが立ち並ぶ小道を前にした場所。そこに集まるファッション好きの人たちを横目で活動している。

当初は、エリアを訪れるのは日本人欧米系から来た人たちが多かった。でも最近はアジア圏からの旅行者が増え続けている。すれ違いきりかえりながら言葉は中国語が圧倒的に多い。みんな最先端のトレンドをかつやく着こなし、日本人か、中国から来ている人か、ぱっと見はわかりにくい。しかし何かが違う。

ある日、先輩と飲んでいると

「最近ではなんかに日本人でツッパる人を見かけなくなりましたね、ファッションはツッパリ合戦じゃないと……」とぼやいた。その時、はっとその違いに気がついた。中国から来た彼らは、いかにもファッションが楽しくてかたがたというように目が輝き、そして何よりも歩く氣勢がツッパっている。

我々日本人も90年代前半、パリのマレ地区にあるセレクトショップの草分け的存在である「レクルール」は必ずチェックしなきゃならない店の一つだった。オーナ

イナは誰か、それがすなわち今の旬であることを伝えていた。コレクションやファッション業界の人や服好きらが占め、フランス人の友人はそれを見て「なんで、日本人はそんなに目をまっさかせながら服を買うの?」とこの迫力に圧倒されていた。

二つの話も時代も場所も違う中で、共通するのはファッションが人を熱狂させている場面という点だ。それは企業、デザイナー、売り場、そして着る人がそれぞれに何か興奮して初めて起こる現象のように思う。今の日本はそれぞれが興奮するのを自己規制しているように見える。その原因はどこにあるのか? 答えを探しに中国へ行ってみたいと思った。(ファッションデザイナー)

「最近ではなんかに日本人でツッパる人を見かけなくなりましたね、ファッションはツッパリ合戦じゃないと……」とぼやいた。その時、はっとその違いに気がついた。中国から来た彼らは、いかにもファッションが楽しくてかたがたというように目が輝き、そして何よりも歩く氣勢がツッパっている。

我々日本人も90年代前半、パリのマレ地区にあるセレクトショップの草分け的存在である「レクルール」は必ずチェックしなきゃならない店の一つだった。オーナ

スナップ

■1950~60年代の英国発祥のエネルギッシュなストリートカルチャーを取り上げた「スウィングン・ロンドン50's-60's ミニスカート・ロック・ベスパー狂騒のポップカルチャー」展が、埼玉県立近代美術館(048-824-0111)で開かれている。マリ

クワントのミニドレス=写真ニヤビバ製のパンツスーツ、モッズやロッカー、車のミニなどモードやインダストリアルデザイン、映像を通じて当時のファッションやライフスタイルを振り返る。9月12日まで。一般千円、高校・大学生800円。月曜休館。

■日本ジーンズ協議会が、「第27回ベストジーンスト2010」の一般投票を募集中だ。「永久ベストジーンスト」として殿堂



入りした木村拓哉、草野剛、浜崎あゆみなどのぞき、最もジーンズが似合うと思う国内在住の有名人を男女1人ずつ選ぶ。投票者から抽選で25組50人を、今秋開催予定の発表会に招待する。応募に関する詳細はホームページ(Url: http://www.best-jeans.com)または事務局(03-3545-3435)へ。8月31日まで。

■沖縄の伝統工芸品を紹介する「沖縄列島大工芸展 手ぐま 屏風らさ 社ぐすく展」が、東京・銀座のスペース銀座の社(080-4200-2078)で25日まで開かれている。喜如嘉の芭蕉布、久米島絹=写真



Café Mode



48年フランス生まれ。90年に入社し、00年から現職

ジョエル・コルティエ

若い時計師の指導もしながら、次の新作も完成に近づいています。求められる限りは働きたい。根底にあるのはやはりパッション。そしてブランドの誇りだと思えます。(菅野俊秀)

1300の部品 気が抜けず

スイスの名門時計ブランドで超複雑モデルの製作に携わる時計師の最上級職人の1人。限定モデルの日本初上陸にあたり来日した。

「ジャガー・ルクルトは、約2000人の時計師を擁し、一貫生産できる「マニファクチュール」です。新作のプロトタイプを作る担当は私を含め3人だけ。実際に作ってみて、設計の変更を求めることもあつた。私たちが認めない時計が世に出ることはありませぬ。小さいころから、マッチンを使って模型を作るなど、静かな環境で細かい作業をするのが好きでした。14歳で時計師の見習いになり、仕事の傍ら専門学校に通って技術を身につけました。必要なのはまず時計づくりへの情熱。そして集中力。冷静さも大切ですね。いわゆる複雑時計で約400ある部品が、今手がけたハイプリス・メカニカのクラン・ソナリには1300以上あり、数々の複雑機構を搭載しています。特に時刻を知らせる音が美しく正確に奏でられるようにするために、神経を使いました。

◆ファッション情報はアサヒ・コムでも(Url: http://www.asahi.com/fashion/)